



昔、女の子が生まれつとな…

となりの桐も、おがつたなあ。

ゆうこちゃんも、きれいになつつまつて。

ばんちゃんも、桐でタンスをこしやいでもらつて
来年、嫁さ行ぐんだぞ。

嫁に来たんだよお。ほら、見でみ、
まあだ、きれいに使つてんべ。



❖娘が生まれると、ぞつて桐を植えた

西会津の地には古くから、家に女の子が生まれる
と、庭に桐の木を植える習わしがあった。それは

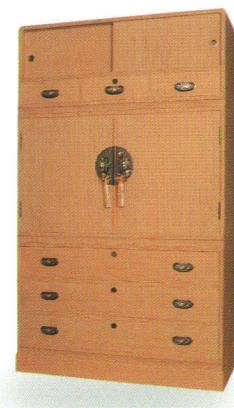
娘が成長して嫁ぐ頃には、桐タンスの一つでもと
思う親心。桐は、初夏には紫のかぐわしい花を咲

かせ、娘とともにスクスクと育っていく。やがて
結婚が決まるとき、桐タンスや桐ゲタなどの花嫁道

具に姿を変えて、一緒に嫁いで行くのだ。桐のタ

ンスは虫がつかないとされ、着物などの収納には、
「やはり桐タンス」と信頼されている。時は流れ

時代が変わった今も、その年に子供が生まれた家
には、町から桐の苗木が贈られている。



❖仲人は七足のわらじをすり切らす

結婚といえば、昔はすべて親同士が決めたもの。

それは昭和初年頃まで続いた。そこで大切な役割
を担つたのが仲人。親戚や知り合いの中でも、信
頼のにおける人に仲人を頼んだものだった。仲人に

なると、何度も両家に足を運ぶのでわらじを七足
もすり切らすと言われた。やつと縁談がまとまる

と、仲人は吉日を選んで酒一升とスルメを持って
嫁の家へ。そこで酒を半分飲み、残りを今度は婿

の家であけ、婚約の披露とするのが習わしだった。